



ENVIRONMENT DESIGN



エンバイロメントデザイン



CATHEDRAL

STAGE





モスパレス施設内に残る廃聖堂。その前身は、信仰が失われた時代の教会である。

文化財としての価値を認められ解体を免れたものの、新たな技術開発のため研究施設の増設を望むモスパレス代表と、保存を求める政府との示談の末、広場として残された。今では研究者たちが足を止めることも稀な、静寂な共用場となっている。

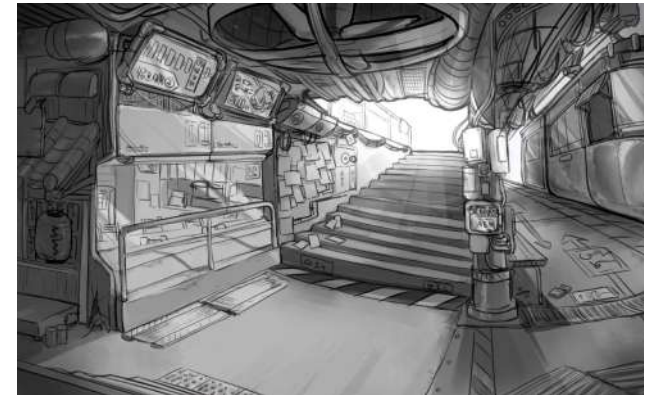
奥に立つオブジェは、モスパレスに人がいなくなった後、太陽信仰を演算によって確立したドールたちが造り上げた偶像である。かつての祈りをささげる場所としての意味はドールたちによって引き継がれた。日時計をモチーフとした形跡があるが、視認性が低く、ただ静かに天を仰いでいるようである。



STATION 01

STAGE





第一メトロポリスの終着点。生活圏から外れたこの駅は、事実上モスパレスの玄関口としてのみ機能した。併設された食堂は研究者専用であり、その従業員すら研究者たちが開発したドールであった。この異常な閉鎖性が公共性を奪い、治安は悪化。ドール任せの管理体制の下、駅は整備されことなく打ち捨てられた当時の面影が強く残っている。

当時の最先端研究であったバイオフィトン研究。しかし、情報の非公開が続くようになってからというもの、モスパレス内への立ち入りを拒まれ続けた民間企業ならびに政府は、駅の小さな掲示板をか取引、もしくは注意勧告の書類で埋め尽くした。

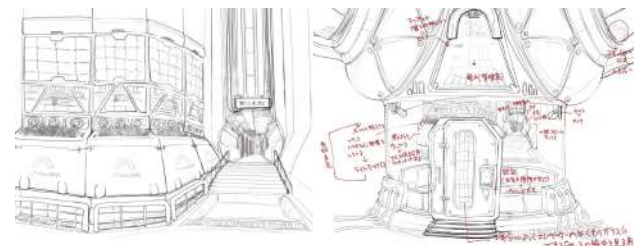


LOBBY

STAGE



◆ MOSS PALACE PARADE ◆



01番駅を抜けると、中央に大きな機械のある三つ又の場所に出る。

ここは、モスパレスのロビーと呼ばれている場所である。ロビーといっても、その機能は失われ、受付や休憩スペースなどもない。それは、かつての研究者が、建設以降外部とのやり取りを拒否し続けていた背景があるためである。しかしながら、モスパレスの代表作であるフォトンポッドが壁一面を覆っている。ある種の技術力の誇示だろうか。中央にあるのは、エレベーターと称されている、転送装置である。



DUST CHUTE

STAGE





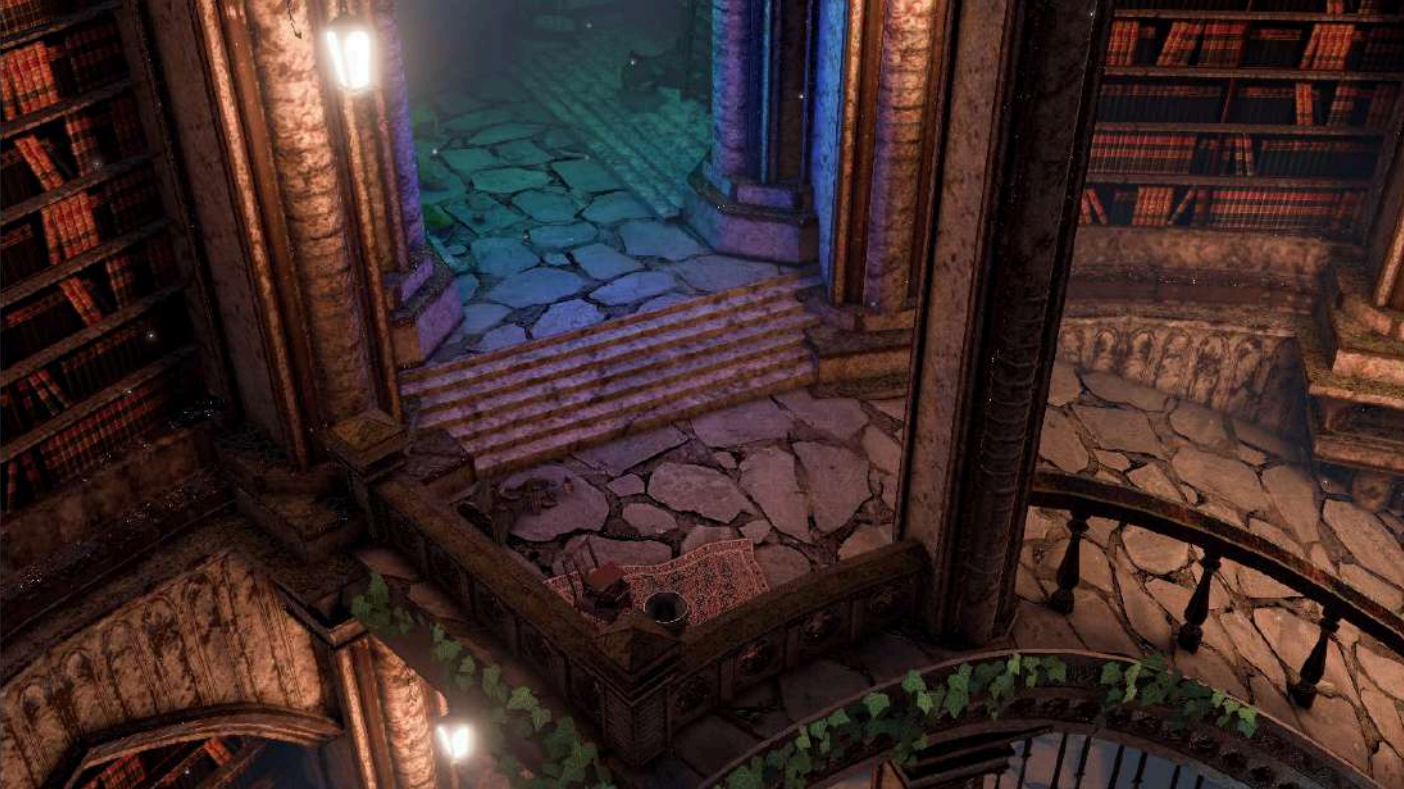
円柱状のゴミ溜めはモスパレス内で発生する全廃棄物の集積及び最終処分場。収集された廃棄物は、ここで焼却、埋め立て処理される。主な廃棄物は、耐用年数を過ぎたラミナ植物、実験過程における失敗作、機能停止したドールなど。中央の管理室から定期的な廃棄処理が実行されていた。この管理室へのアクセス権は担当研究員のみ限定されていたため、他の職員やドールが当エリアに立ち入ることはない。



LIBRARY

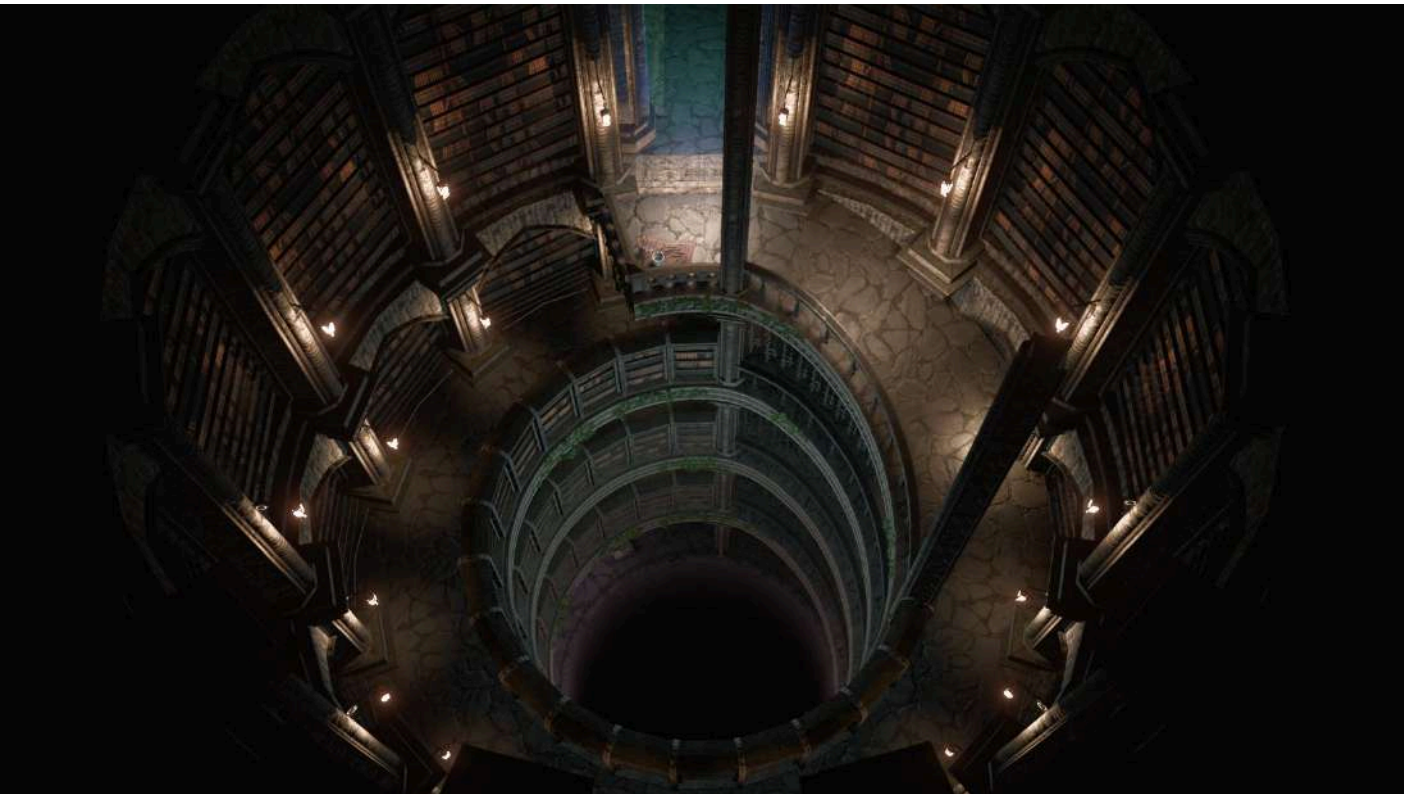
STAGE





元来、大規模実験を目的とした地下の多目的実験室であった。本格的な利用が開始されたのは、ラミナボーグプロジェクトにおける移植実験の拠点としてであり、プロジェクト後は被験体であった博士の隔離施設として転用された。

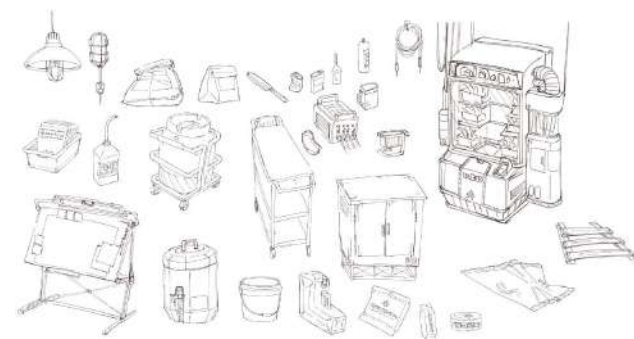
その後、博士が物理的に移動不能となった状況を受け、大聖堂の地下埋没区画を拡張・再利用する形で改修が実施された。その結果、大量の資料を保管する図書保管庫となり、現在の「図書館」となった。



STORAGE PLACE

STAGE





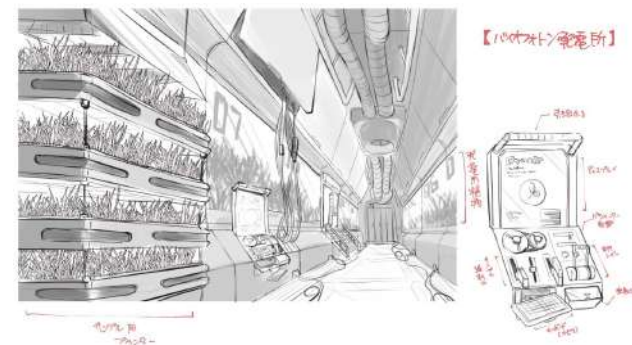
モスパレス地下、外からの資材の輸送として最も人の出入りが多かった地下通路の先にある部屋。ここには、モスパレスの本部によって管理された、実験用ラミナ植物の自動販売機が設置されている。ラミナ植物の特異な性質から、室内では厳重に管理される必要がある。この自動販売機では、認可された研究および担当研究者のみが購入できる仕組みとなっている。これは、ラミナ植物の最高研究機関であるモスパレスといえども、多額の資金によって世界中のラミナ植物を独占、収集するほかないほど、地球上のあらゆる資材が枯渇状態に陥っているためだ。



BIOPHOTON POWER PLANT

STAGE





ラミナ植物のバイオフィトンを利用する発電施設。規模は小さいながら、モスパレスの稼働電力をほぼ全て供給している。

育苗されたラミナ植物は、増幅器を備えた発電プラントー室へ移送される。ここでバイオフィトンは集積・増幅され、電力へと変換される。出力制御は、増幅器の専用パーツ換装によって行われる。

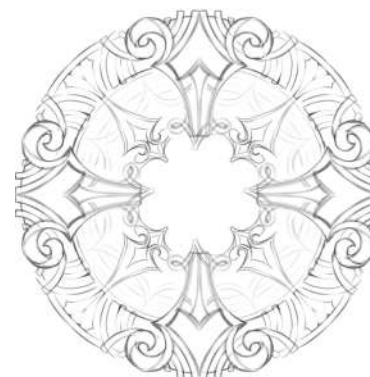
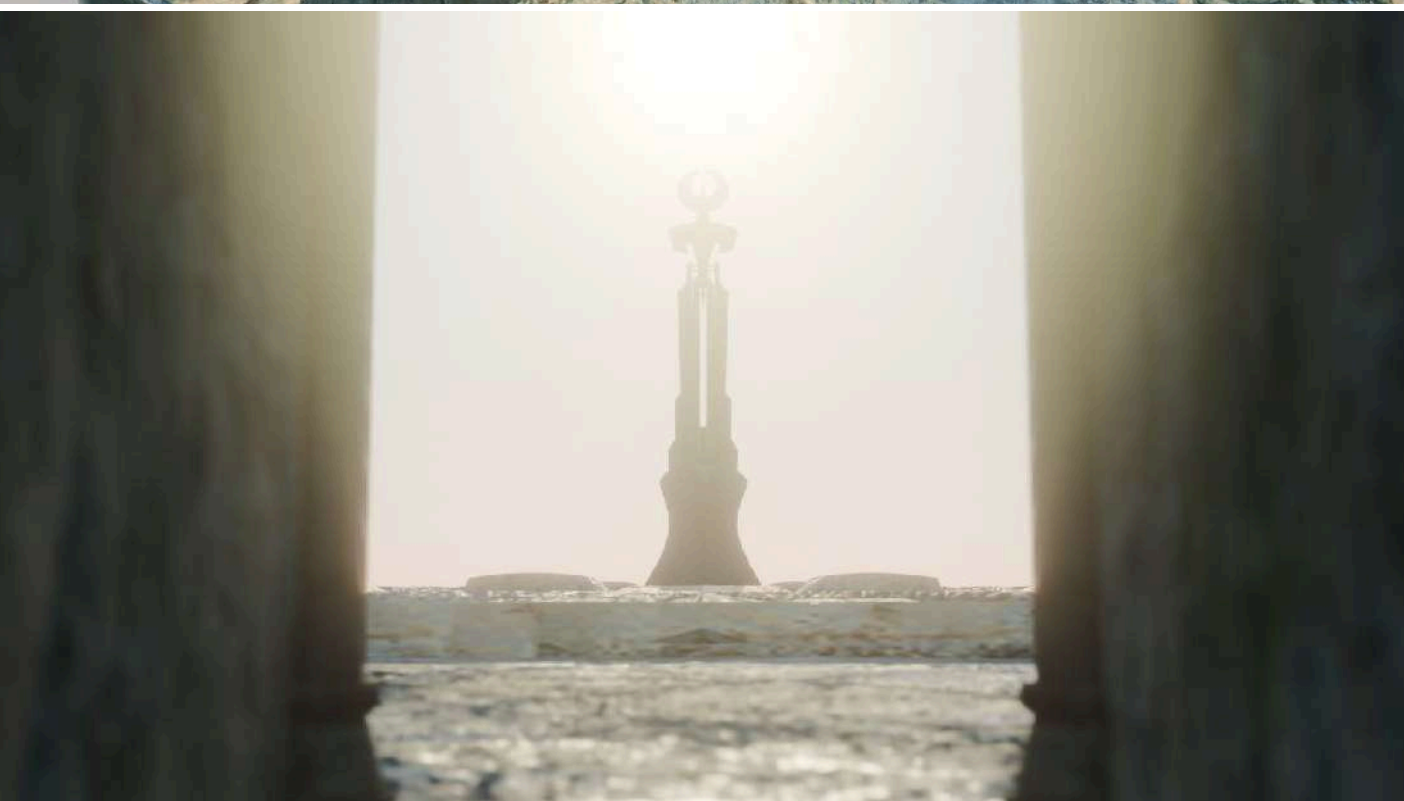
施設はドール及び発電所専用ロボットによって完全自動管理されており、現在も無人で稼働し続けている。

OUTSIDE

STAGE



◆ MOSS PALACE PARADE ◆



行き着く先は、真実か虚構か。その隔たりは、天と地ほどに大きい。

太陽信仰に飲まれた者の終着点は、天国にも似た幻想世界。しかし、剥き出しの太陽光がすべてを焼き尽くす、偽りの楽園に過ぎない。

対して、太陽を克服した者だけが、真実の世界へと至る。博士の希望を背負い、踏みしめる現実の地上。その先には、次なる時代の礎となる、新たなメトロポリスが待っている。